年度当初保護者会用**令和7年度 多摩市立連光寺小学校 学校経営方針**

多摩市立連光寺小学校 校長 関口 寿也

終身雇用制度が崩れ、同時に仕事の充実度よりも自身の生活の幸福度を優先することが一般的になりました。人間が人間らしく生きるという視点においては好ましい世相であるといえます。その流れもあってか、新規学卒就職者の就職後3年以内の離職率は、「教育、学習支援業」では、高卒、大卒共に3位の離職率で、それぞれ53.1%、46.6%となっています。もちろん要因は一元的ではありません。振り返ってみて、社会に出た若者の離職理由を子供に当てはめてみると、

- ・学校がつまらない
- ・活動意欲がわからない
- ・懸命に何かに取り組んだ経験が少ない

と当てはめることができそうです。またこの3つは互いに絡み合い作用し合っています。そういう意味では、大人にとっての離職率は、子供たちにとっての学校の意義と同義と捉えることもできます。併せて、子供たちは小学校卒業後10年ばかりの間に社会に出ていくのです。

どうすれば解決の糸口が見えるのでしょうか。現代は様々な対応や配慮がある中で、教育は個別対応、個別最適化を求められています。それは時に受け手のスタンスでの受動的対応になりがちです。その構図では、子供たちが希望をもって前向きになるムーブメントを起こすことは至難であり、子供たち自身にその波が起きることを委ねることになってしまいます。それでは教師の存在意義が問われます。私たちは集団に対して仕手になる必要があります。教育用語でいえば、学級経営(授業経営)であり、学級風土(授業風土)づくりです。これなしに、子供たちが自己肯定感や自己有用感をもって「学んで賢くなれた」「この学校でよかった」「みんなに出会えてよかった」と思えるストーリーを描くことはできないはずです。小学校において学級経営(授業経営)は、学校教育活動の根幹です。それを高める教育活動を意図的・計画的に進めていく必要性に今迫られています。私たちは、仲間と共に相乗効果で育つ子供、集団でのダイナミクスで育つ環境を構築していくことで、子供の成長を支援していきたいと考えています。

1 教育目標

人権尊重の精神を基盤として自ら考え学ぶ力を身に付け、持続可能な社会の担い手として主体的に生きる人間としての資質・能力・態度を高めるために、次の目標を設定する。

- ◎ 考えてやりぬく子
主体的に学び、高め合いながら考え行動できる児童
- 明るく思いやりのある子
多くの人とかかわり、自他を尊重しながら行動できる明朗で心豊かな児童
- たくましくじょうぶな子
体力向上と心身の健康の保持増進に努める強い意志と体をもった児童

2 目指す学校像**(1) 児童が「もっと伸びたい」と実感できる学校生活**

児童が、学びや人間関係において、「賢くなった」という振り返りや「思いやりの心」に気付くことが自己の成長を実感する時である。これは児童の学習意欲、生活意欲に直結する。その継続から、児童自らが「もっと伸びたい」と実感できる教育活動を推し進める。そこには、自己肯定感、自己有用感が学校生活の基礎として存在する。

(2) 保護者・地域にとって、安全・安心で信頼できる学校生活

学校、保護者、地域の共通する願いは、子供たちのよりよい成長である。そのためには児童が安心

して学校生活を送ることが欠かせない。その視点を見失うことなく、迅速で誠意のある対応、随時相談できる関係づくり、日常的な教育への協働を心がけて信頼を高める。

(3) 教職員にとって、やりがいをもって協働できる学校生活

教職員の喜びは、指導による児童の成長を体感することである。教職員として理想と信念を欠くことなく指導を充実させ、児童の成長のために主体的に協働する意識をもち邁進する。

3 指導に関わる具体的な取り組み

(1) 考えてやりぬく子（「多面的思考力」「問題解決力」「郷土愛」の育成）

【基礎学力】

- ① 学力向上委員会を中心に、授業改善推進プランを基にした指導方法の工夫改善と検証を常に行い、基礎学力の向上を図る。
- ② 「できるようになったこと」を実感できる学習の振り返りを恒常的にを行い、児童の自己評価力（メタ認知）や自己肯定感を高める。
- ③ 全学年で、学年内の恒常的な交換授業を恒常的にを行い、児童観、授業観、教材観を養い授業力を向上する。学年経営、感染症のリスク管理、働き方改革の観点としても推し進める。
- ④ ICTを活用した個別最適な学びを躊躇することなく実践する。
- ⑤ 全児童が家庭学習として自主学習に取り組み、主体的に学びに向かう姿勢を身に付ける。発展的に先を見据えた際、探究学習的な内容をその目的として目指す。週1回程度を目安とするが、高学年においては日々の宿題を内包する自主学習となることが児童の自律心を養うものとして望ましい。
- ⑥ 視写や手で文字を書く機会を意識して設け、丁寧に文字を記すことを指導する。
- ⑦ 氏名は既習でなくとも漢字で書ければ漢字で書くことを推奨する。併せて、氏名は親から授かった意味のある文字であることも日常的に理解させる。

【読書指導】

- ① 行事時数として確保した読書指導を有効活用し、図書委員会の積極的な取り組みも行うことで、児童が活字に触れる機会を恒常的に増やす工夫を重ね、国語力、読解力の向上を図る。
- ② 学校図書館や学級文庫において、日本の文化資源であるマンガ等も積極的に扱い、日常的に活字に接することができる環境を構築する。
- ③ 読書活動によって身に付けた言語能力を、各教科等と連携して効果的に充実させ、問題解決力に不可欠な思考力、判断力、表現力の向上を図る。

【ESDによるSDGs達成】

- ① 総合的な学習の時間を核とした全教育活動において、環境資源、人材資源、文化資源、社会資源を存分に用いて探究活動・ESDを実践する。
- ② 探究活動・ESDは、カリキュラム・マネジメントや行事との連携を通してホール・スクール・アプローチで進め、児童の多面的思考力・問題解決力を意図的・計画的に育てる。
- ③ 学びをSDGsと関連付けて価値付ける。「世界の役に立てた」ことをメタ認知させることで自己有用感を高め、郷土愛を基にした持続可能な社会づくりに資する人材育成を図る。
- ④ 予測できない社会を見据え、持続可能な社会づくりに自身をどう生かしていけばよいのか、その生きざまを見つめさせる。主体的に考え、行動できる人材を育成するためのアントレプレナーシップ教育の視点を学習に取り込む。

(2) 明るく思いやりのある子（「豊かな情操」「人間関係形成力」の育成）

【道徳】

- ① 人権尊重の精神を基に道徳科授業を充実させ、「考え、議論する道徳」を実践する。「豊かな心」を育むことでいじめ防止も図る。
- ② 道徳指導で扱った内容を生活・総合や特活等、全教育活動の中で実践する。

【生命尊重】

- ① 全教育活動を通し、他者との関わりを深め、自他の生命を尊重する態度を身に付けることで、「生きる力」を育み、いじめ・体罰を根絶するとともに不登校・自殺を未然に防止する。
- ② 生き物の飼育や触れ合い、関わり方を教員と児童が共有することで、優しさや思いやりの心、他者理解力を育てる。第2学年では、うさぎを室内飼育する生活実践を行う。

【特別活動・生活指導】

- ① 委員会活動やクラブ活動、行事、異年齢交流等において、児童に考え判断させることで主体性を高めるとともに、自助・共助につながる他者と協力する態度やコミュニケーション力を育む。
- ② 1年生で「かがやきプログラム」を活用し、ソーシャル・スキル・トレーニングに取り組む。生活習慣の確立や社会性を育成することで規範意識を高める。SSTは行事時数として、4/9～30に朝の1/3時間を使い確実に実施する。
- ③ 優しさと厳しさのある生活指導で、「さしみちゃん(さいごまでせいよくみとめでちゃんときこう)」、時間を守る意識、ネットリテラシー等、集団生活上の基本的な生活習慣の確立と、規範意識の育成を徹底する。
- ④ 日本古来の生活文化を、教員、児童双方で確認し意識する活動を行う。改めて他者意識に目覚め、心地よい生活を送ることができるようにする。

(3) たくましくじょうぶな子（「自己管理能力」「くじけない心」の育成）

【心身の健康】

- ① 集会や休み時間の外遊び推奨、保健指導、体育集会等、発達段階を考慮した運動の啓発を組織的・計画的に進め、体力の向上や心身の健康の保持増進を図る。
- ② 特別活動を中心に全教育活動において「あきらめない心」「やりぬく力」の育成を図り、キャリア・パスポート「あしあと」を用いた振り返りを行う中で自己の成長を確かめ、自己肯定感・自己有用感を育成する。
- ③ 体育の授業時間確保、及び熱中症予防を考慮し、6、7月は猛暑であることを想定して授業時数を他の月に分散させる。

【危機管理能力】

- ① 危機管理意識を常にもたせ、登下校の行動規範、交通安全、不審者対応、ネットリテラシーはあらゆる機会を用いて繰り返し指導し、状況判断力と対応力の向上を図る。
- ② 毎月のいじめ防止委員会を中心としたいじめの早期発見、迅速な対応、継続した見守りにより、児童の心身の安全への取り組みを進める。
- ③ 月毎のアレルギー対応委員会を中心に、複数の目でアレルギー対応のチェックを実施する。特に、食物アレルギーにおけるアナフィラキシーショックは絶対に起こさない。
- ④ スマートフォンや通信のできるゲームへの依存を防ぐため、随時啓発活動を行う。依存は不登校に直結する。児童に不必要なスマートフォンの保持は勧めないことを常にアナウンスする。
- ⑤ 児童の安全管理上の本校の最重要課題がSNSトラブルであることを考慮し、セーフティ教室は、全学年が学年の発達段階に応じたネットモラルに関する授業実践を行う。
- ⑥ 暑い時期の水分補給に関して、上水道の少ない校外等では、児童自身の自己管理能力の向上を図るため、宿泊学習、校外学習時は複数の水筒や緊急用の小銭を持参させ、活用する。
- ⑦

(4) 教育目標の達成に向けたその他の事項

【特別支援教育】

- ① 特別支援教室を中心に、全教職員や関係機関との協力により、「だれ一人取り残さない」という理念に基づき、合理的配慮の実践によりノーマライゼーションとインクルーシブ教育を推進する。
- ② 校内委員会で特別な支援が必要と判断された児童について、支援の手立てを保護者と相談し講じる。早期の支援は、児童の成長を促し、二次障がいや成長過程のトラブルを未然防止する。

- ③ 支援を必要とする児童に、待ったはない。特別支援教室の説明、見学、体験等、随時行う。
- ④ かがやき学級教員が、通常級担任に教室内的の合理的配慮のアドバイスを行う。

【保幼小連携・小中連携・地域連携】

- ① 幼稚園や保育園、及び中学校と連携し、小1プロブレムや中1ギャップの解消を図る。また、生活指導及び特別支援教育の情報交換とともに、教育課程上の連携を行う。
- ② 近隣保育園と教員の交流事業を推進する。
- ③ 学校運営協議会や地域学校協働本部を活用して、学校と家庭・地域が一体となった取り組みを全教育活動で実施する。またその成果をコミュニティ・スクールとして発信する。

4 その他

- (1) 学級閉鎖や感染症における欠席の際に、オンライン授業を実施します。担任が感染症に罹患した場合は、朝の会のみ実施します。
- (2) 保護者会で保護者同士が話す機会を意識して設定します。
- (3) 脱プラスチック推進。「あゆみ」の紙ファイル化、アサガオの鉢の再利用、教材(実験キット含)の選択等、最大限配慮する。教職員のペットボトルの持ち込みは禁止し、教材としてのペットボトル等のプラスチック類を家庭から持ち物として持ってこさせることも極力抑えます。
- (4) 給食や調理実習でのフードロスに向け、保健給食部や学年、授業において手立てを講じます。
- (5) 給食費公費化(R6, R7)、医療費行政負担、高校無償化等の施策が実施されています。私費会計軽減のため、教材選択を最大限考慮します。
- (6) 平日の電話対応はこれまで通り7時～18時までとさせていただきます。夜間や週休日の電話対応はできません。夜間や土日祝に緊急のご連絡が必要になった際は、多摩市役所庁舎管理室(042-338-6855)にご連絡ください。
- (7) 学校行事等、保護者の皆様にお手伝いいただきたい事柄については、地域学校協働本部からボランティアのお願いを行います。
- (8) バス代(遠足、総合見学、宿泊)の値上げによる実施可否について。
- (9) システム障害に学ぶ情報提供の大切さ。LINEメールやHPでの情報提供を密に行っていきます。